

Title	An investigation of the sociolinguistic aspects of communities in border areas : The case of Nakonde on the Zambia-Tanzania border
Author(s)	Mwape, A. Fenson
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58756
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	ムワベ・アラム・フェンソン			
本籍(国籍)				
学位の種類	博士(言語文化学)			
学位記番号	甲第27号			
学位授与年月日	平成15年3月27日			
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士			
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻			
学位論文題目	AN INVESTIGATION OF THE SOCIOLINGUISTIC ASPECTS OF COMMUNITIES IN BORDER AREAS:THE CASE OF NAKONDE ON THE ZAMBIA - TANZANIA BORDER			
論文審査委員	主査	教授	稗田	乃久
	副査	教授	中島	美行
	副査	教授	高階	功興
	副査	助教授	上田	
	副査	中部大学教授	宮本	

論文の内容要旨

本研究は、「国境地域における社会言語学的調査」に基づいて行われている。その目的は、ザンビアの国境地域における社会言語学的諸特徴を考察することである。筆者は個別的事例研究の調査地として、ザンビア-タンザニア国境地域に位置する町、ナコンデ(Nakonde)を選択した。これまで社会言語学的調査の対象とされてこなかったこのナコンデを調査することにより、本研究は新しい調査対象を開拓することになった。これにより、本研究はザンビアの国境地域における社会言語学的研究の先駆的立場にあり、またアフリカの国境地域における社会言語学的研究の序章的立場にあると主張できるであろう。こうしたことから、本研究は社会言語学の理論全般に対しても重要な貢献を果たしている。

本研究において筆者は、国境地域は全般的に多民族で多言語であることを明らかにする。中心都市から遠く離れたナコンデもこれらの特徴を有している。筆者が明らかにしたこの事実は、(ナコンデのような)村落地域は典型的な単一言語社会を形成している、という従来からの認識に対し反証を挙げている。本研究はまた、ナコンデの国境地域においては、国境を跨いで、文化的、政治的、経済的その他の強い結びつきが存在していることも明らかにしている。こうした国境地域の人々が行うやり取りの中では、主にベムバ語(Bemba)、ナムワンガ語(Namwanga)そしてスワヒリ語(Swahili)といった、地域共同体言語(local community languages)が使用されている。これら諸言語の話者が行うやり取りによって、言語自体の接触も行われる。そしてこうした地域間関係を考察する中で、国境を跨いだ協力や開発の重要性も認識されるようになる。

本研究はまた、言語や他の文化に関する諸問題は、例えば、国民国家間における国境を跨いだ活動の促進といった、より広い分野へ応用することができることも明らかにしている。こうした議論は、平和や安全の維持、教育、成人識字率などといった諸問題とも関連している。本研究は、ザンビア英語 (Zambian English) や都市ベンバ語 (Town Bemba) といった概念の理論的再定義も要求し、これらの概念はその中に多様性を包含していると認識されるべきであると主張する。本研究が果たしたもう一つの重要な貢献は、「部分的言語転換 (Partial Language Shift: PLS)」や「国境地域における言語の使い分け (Borderline Diglossia)」といった概念を導入したことである。伝統的な諸概念の代わりにこれらの概念を用いることによって、調査地域の状況をより精確に説明できるようになったのである。本論文の具体的な構成は以下の通りである。

第1章は、本研究の背景を提示している。本章において筆者は、全般的及び個別的研究対象、本研究を行うに至らせた動機、ならびに本研究の持つ限界性を概観する。第2章は、本研究の理論的側面に関する章である。本章において筆者はまず、社会言語学的理論の概観と理論的観点における本研究の位置付けを行う。それに引き続いて、本研究で用いられることになる理論的及び用語的諸概念についての説明や本研究に関係する先行研究の概観が行われる。また本章では、現地調査において用いられた方法や手段の説明及び、調査対象地の地理的及び民族的解説もあわせて行う。

第3章では、ザンビア及び他の南部アフリカ諸国の社会言語学的状況の説明が行われる。ここで注目すべきは、これら諸国家は異なる歴史環境を有しているにも関わらず、それぞれの地域においてアフリカン言語が重要な役割を果たしていると認識されている点である。

第4章では、英語とザンビアの諸言語が、国民国家のレベルにおいて、どのような相互作用を与えあって来たのか、という問題が考察される。本章が分析するのは、様々な数多くの国民生活(すなわち、教育、メディア、政治・行政、音楽、娯楽など)の領域において、英語とザンビアの諸言語が果たしてきた役割である。ここでは、英語が国民生活の重要な機能を果たし続ける一方で、公用語に指定されている言語も含め現地の諸言語 (indigenous languages) はそうした生活場面の限定された部分のみにおいて機能している、ということが明らかにされる。また筆者は本章の最後において、いわゆる「ザンビア英語」に注目し、公共の場における英語使用の傾向についての考察を行う。そして、英語使用の中にも、ザンビアにおいては実際にくつつかの多様性を見い出すことができることを主張する。第5章においては、ナコンデにおける言語知識 (language knowledge) 及び言語使用 (language use) の諸形態が論じられる。本章において筆者は、調査地で活動する諸個人が、社会のレベル及び個人のレベルそれぞれにお

いて使用する言語について論じる。ここでは、場(ドメイン: domain)という概念が、言語使用の形態に関する議論の基本「単位」として用いられることになる。

第6章では、言語転換(コード・スイッチング: code-switching)及び言語態度(language attitude)が扱われる。本章において筆者は、まずインタビューや日常会話の記録からの例を用いて、多言語状況における言語使用の重要な相としての言語転換について論じ、言語転換がナコンデの日常の言語使用の一般的な特徴であることを明らかにする。それに続いて筆者は、言語使用者の第一言語(L1)、公用語(ベンバ語と英語)、そしてスワヒリ語やその他の諸言語に対する態度に注目して、調査地域における言語態度について論じる。これらを受けて本章では、支配的な母語に対して全般的に肯定的な態度を有しているナムワンガ(Namwanga)地域の言語を除き、他の諸言語は肯定的にも否定的にも認識されていることが明らかにされる。

第7章では、ナコンデにおけるベンバ語とスワヒリ語の影響について論じられる。筆者は本章において、これら2言語間の構造その他諸関係のみならず、後者(スワヒリ語)の前者(ベンバ語)に対する(特に語彙においての)強い影響についても実証する。第8章は本論文の最終章である。本章において筆者は、第1章で概観した本研究の目的及び第2章で概観した理論的限界と全体の研究を照らし合わせながら、本研究において明らかにされた事実を整理する。また筆者は、本研究が明らかにしたことを国家間の国境を跨いだ活動(平和や安全の維持、文化的結びつき、教育、科学技術など)へ応用することについても考察する。なお本章には、アフリカン言語が「目立たない(low profile)」言語から世界から注目を浴びる立場の言語になってほしいという、筆者の心からの願いも込められている。

本論文の巻末には付録が掲載されている。これらの付録には、現地調査において記録されたインタビューの書き起こしや、データ収集の際に用いられた質問表及びインタビュー原案の見本が収録されている。

本研究がザンビア及びアフリカ全般の国境地域におけるさらなる研究のきっかけとなり、本論文がその重要な起点として貢献できることを筆者は切に願っている。

MWAPE Fenson

論文審査の結果の要旨

言語社会を外部から見る研究者は、えてして自分自身が信奉する言語学理論を検証するためにのみ資料の収集を行い、その資料から自分自身の興味ある事実のみを議論する傾向がある。それにたいして言語社会の内部に立脚する研究者は、自らが所属する言語社会を研究するにあたり、自らの所属する言語社会の文化や言語の発展をめざすために、言語資料の収集や理論的研究を行う。社会言語学的な様々な問題が山積する現代社会にあって、言語学者が求められているのは、また、言語学者の存在意義があるとすれば、それは後者の研究態度であろう。ムワペ氏の論文は、まさしくその後者の研究態度による産物の好例となっている。

ムワペ氏の論文は、およそ前半と後半の2つの部分に分かれている。前半は、ムワペ氏の生まれ育った国、ザンビアにおける言語社会の社会言語学的記述と、議論の枠組みや議論の基本的概念の定義に費やされている。後半は、ムワペ氏自身が実際に調査し、資料を収集した、ナコンデと呼ばれる、ザンビアと、隣国、タンザニアとの国境地域における人口約5万人のディスクリクトの多言語社会について、社会言語学的考察をまとめたものである。英文622ページに及ぶ実に浩瀚なものである。国境地域において、あるいは、国境を越えて使用される言語の言語生態的研究は、最近になってようやく着目されるようになったばかりであり、氏の論文は、この分野のさきがけともなる研究成果である。

本文8章(総448ページ)のほか、隣地調査での録音資料の翻字、ザンビア英語のサンプル資料、調査に用いられた質問票ほかを含む付録資料(総49ページ)、および、参考文献(総25ページ)からなる。第1章では、研究の目的と動機、研究の性格や着眼点、論文全体の構成を説明している。第2章では、研究の理論的・方法論的基礎、主として本論文が扱う社会言語学上の多様な専門用語が説明されるほか、調査地域の地理的・民族誌的叙述が克明になされる。第3章では、ザンビアを主として、南部アフリカ諸国(タンザニア、ナミビア、南アフリカ、モザンビーク、アンゴラ、ジンバブエ、ボツワナ、レソト、スワジランド、マアウィ、コンゴ民主共和国)の社会言語学的なプロフィール、ザンビアの言語状況、国境地帯言語社会の地理的文化的特徴、ザンビアでの先行研究などの説明がある。第4章では、国家の公用語である英語と民族諸言語との社会言語学上の諸関係が、教育・政治・行政・マスメディア・宗教・音楽・商業など各種の生活文化の領域に即して論じられる。第5章では、調査地ナコンデの言語社会の特徴を叙述し、家庭、市場、教育ほか多様な場面での言語使用の実態が説明される。第6章では、ナコンデにおけるコードスイッチの実際、母語、地域の有力言語であるペンバ語とスワヒリ語、公用語である英語などに対する言語態度が丁寧に説明される。第7章では、前章の考察を特化して、ナコンデ地域の有力共通語であるペンバ語とスワヒリ語の諸関係、ザンビア諸言語へ及ぼすスワヒリ語の影響などが論じられる。第8章は、本論文の結論であり、これが明らかにした論点の整理、ならびに、言語政策や教育政策、開発政策などへの応用について論じられる。

前半部分のザンビアにおける社会言語学的記述の特徴は、たんにザンビアが多言語使用社会であることを、ムワペ氏は指摘するだけではない。ザンビアが重層的な多言語使用社会になった経緯を、通時的に考察している。英語と7つのアフリカ固有の言語がザンビアにおける公用語となった経緯を、また、これらの公用語と、公用語には指定されなかった多くのアフリカ固有の言語との関係を、通時的に、また、共時的に考察している。社会の

様々なドメイン（社会言語的領域）、すなわち、家庭、職場、教育現場、宗教現場、社会コミュニティなど、における言語使用を考察している。とくに、教育というドメインにおける言語使用と言語政策に関する議論は、外部の研究者ではアクセスが容易ではない資料を多く用いている。しかし、この前半部でもっとも評価できる点は、氏が所属する言語社会の文化や言語の発達を目指すという視点をつねに保持して、ザンビアにおける社会言語学的な諸問題について議論を展開していることである。それゆえに、ヒステリックな批判になりがちな植民地時代やその後の言語政策を論じる議論が、ムワペ氏の論文のなかでは将来の言語発達を目指した建設的な議論の姿をとっている。

後半部分の特徴は、国境を越えて使用される言語の社会言語学的機能を議論するうえで、たんにその言語が話される地域における使用や言語態度を考察するだけではなく、国家全体からの視点や、さらに、国境をこえた隣国との関係からの視点や、さらに大きな南部アフリカ地域圏における社会関係からの視点で、国境地域という小地域での言語現象を説明する。この視点は、従来の国境を越えて使用される言語の言語生態的な研究では存在しなかった。これは、この論文での独創的な着想といえ、将来の研究に多大の刺激と貢献をあたえる。

この浩瀚な学位論文は、実に手堅い調査と幅広い文献の渉猟によって、ザンビアにおける社会言語学研究の第一歩を画するものと評価できる。また、この成果は、他のアフリカ諸国での言語社会学研究の遂行にも大いに資することが期待される。また、国境地帯言語社会への着目は、アフリカ諸国のアカデミズムにおいても最近の関心事であるが、こうした関心にいち早く反応し、社会言語学の最新の理論と方法論を駆使して、ほぼ所期に設定した課題のすべてにわたって今後の研究の基礎となる成果を積み上げた。ここしばらくは、広く社会言語学分野へのザンビア人研究者による貴重な貢献として高く評価されることは間違いない。学位請求論文として、質、量ともに申し分がないと結論する。